

八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について

山崎 真治¹⁾ 新里 尚美²⁾ 金城 達²⁾ 山田 浩久³⁾ 藤田 祐樹¹⁾

A Report of Archaeological Materials Collected around the Cliff of the Gushichan-Gusuku, Yaese town, Okinawa

Shinji YAMASAKI¹⁾, Naomi SHINZATO²⁾, Tatsuru KINJO²⁾,
Hirohisa YAMADA³⁾, Masaki FUJITA¹⁾

1 はじめに

沖縄県には化石の保存に適した石灰岩が広く分布しており、港川人をはじめとする人類化石がいくつも発見されている。この地質的好条件を踏まえ、沖縄県立博物館・美術館では、平成18年度より新たな人類化石の発見をめざした調査研究に取り組んでいる。平成18・19年度には南城市ハナダガマ遺跡の発掘調査を実施し、2500点を超えるシカ類化石を採集した。また、平成19・20年度には南城市武芸洞の発掘調査を実施し、沖縄島南部では初となる爪形文期の包含層を確認するとともに、縄文時代晩期と推測される石棺墓1基を確認した。武芸洞の調査については本誌別稿(山崎ほか 2009)を参照いただきたい。

また、上記の発掘調査と並行して、石灰岩地帯での地表調査を実施し、南城市および八重瀬町で数カ所の遺物散布地点を確認した。今回紹介するのは、2008年3月、具志頭グスク崖下で採集された土器、貝製品、人骨等の遺物である。具志頭グスク崖下採集の遺物には、台地上の遺跡から落下したと考えられるものも含まれるが、岩陰地点で集中的に採集された爪形文土器片や人骨片にはまとまりがあり、付近に先史時代の生活址や墓地が存在する可能性が考

えられる。特に、爪形文土器については、八重瀬町域では初の確認例となる重要な資料でもあるので、ここに詳しく報告しておきたい。

なお本稿の執筆分担は下記の通りである。

- 1 はじめに (山崎)
 - 2 具志頭グスクと周辺の遺跡 (新里)
 - 3 具志頭グスク崖下の概要 (山崎)
 - 4 土器 (金城)
 - 5 貝製品 (山田)
 - 6 人骨 (藤田)
 - 7 獣骨・貝類 (山崎)
 - 8 まとめ (山崎、新里、金城、山田、藤田)
- (山崎)

2 具志頭グスクと周辺の遺跡

八重瀬町具志頭に所在する具志頭グスクは、白水川河口に面した標高50m程度の石灰岩台地上に立地し、南側と東側を断崖に囲まれた天然の要害をなしている(第1図、第2図)。具志頭グスクの台地上からは、これまでの調査によって縄文時代から近代にわたる各時期の遺物が発見されている(具志頭村教育委員会 1986)。また、グスク崖下に所在する

※ 1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

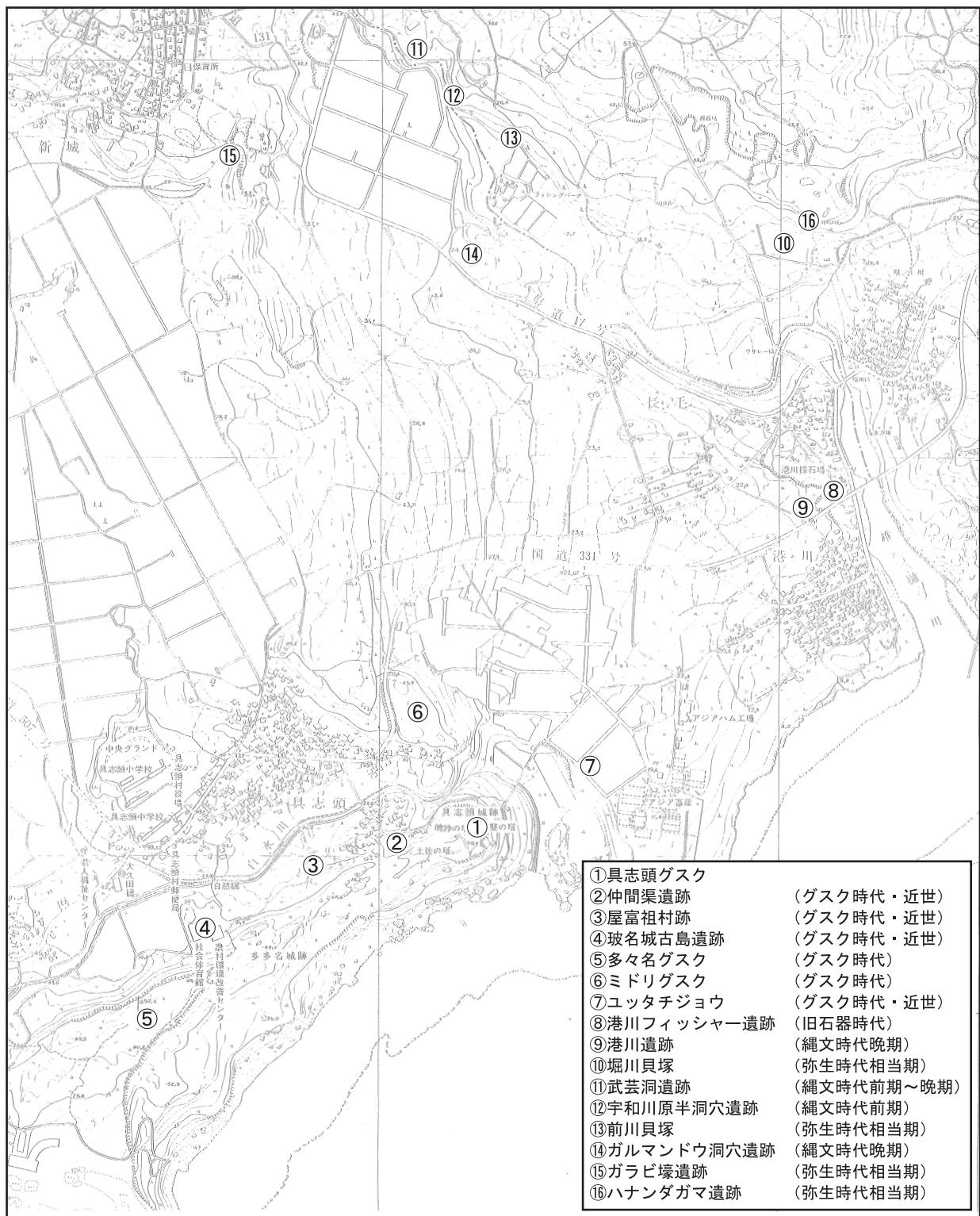
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

2) 八重瀬町教育委員会 〒901-0512 沖縄県島尻郡八重瀬町字具志頭352番地

Education board, Yaese Town, Gushikami 352, Yaese-cho, Shimajiri-gun, Okinawa, 901-0512 Japan.

3) 沖縄県立埋蔵文化財センター 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7

Okinawa Prefectural Archaeological Center, Uehara 193-7, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa 903-0125 Japan.



第1図 具志頭グスクの位置と周辺の遺跡



第2図 具志頭グスク周辺地形図

通称クラシジョウ壕と呼ばれる洞穴からは明刀銭が採集されており、その顛末は當眞嗣一氏によって沖縄県立博物館紀要にまとめられている（當眞1997）。

具志頭グスクが所在する一帯は琉球石灰岩からなる台地が広がっている。琉球石灰岩は雨水に溶けやすい性質を有しているため、数多くの鍾乳洞や岩陰が発達し、また、台地の縁辺部には豊富な湧き水がみられる。本遺跡と隣接して白水川、さらに北側約1 kmには大きな河川雄樋川が流れており、人の居

住空間として最適な場所であったことが考えられる。それを立証するかのように、一帯には多くの遺跡が存在している。第1図に示すように、遺跡は、具志頭グスクが立地する琉球石灰岩台地上と雄樋川沿いに集中する傾向にある。古い遺跡では、雄樋川河口近くから約1万8,000年前の化石人骨（港川人）が発見された港川フィッシャー遺跡、上流に縄文時代晩期の埋葬跡である武芸洞遺跡、ガルマンドウ洞穴遺跡などが発見されており、本遺跡一帯にはその当

時から人々が住んでいたことがわかっている。

また、弥生時代相当期の遺跡やグスク時代の遺跡及び近世の遺跡も見つかっており、具志頭グスク周辺は現在に至るまで古くから人々の営みがみられ、地の利の良い環境であったことが窺い知れる。

(新里)

3 具志頭グスク崖下の概要

具志頭グスク崖下では、地点によって採集される遺物の内容に差異が認められるので、ここでは以下のように区分しておく。まず、県道のコンクリート擁壁に設置された階段を登った左手に位置する、石灰岩の崖がオーバーハングして岩陰状を呈する地点を岩陰地点と呼ぶ(写真1、2)。この部分からは、爪形文土器や人骨等が集中的に採集されている。

岩陰地点の西側には、ほぼ垂直に切り立った石灰岩の岩壁が連っており、岩壁下部には崖線上から崩落した礫や土砂が厚く堆積している。この堆積物表面から若干の土器片等が採集されており、この部分を崖下地点と呼ぶことにしたい。

(山崎)

4 南島爪形文土器

具志頭グスク崖下(岩陰地点)より総数11点の南島爪形文土器が表採されている。表採した土器は全て胴部の小破片で、石灰分が付着しているものや器面が大きく摩滅しているものもあり、総数11点中、

観察可能な7点について特徴を述べる(第3図)。今回土器を報告するにあたり、以下の特徴別に分類する。

I 類(第3図1、2)

1は砂質の胎土で黒色粒、雲母、石灰質粒を含む。器面はオリーブ褐色を呈し、外面に指の腹部を用い、斜位の縦長の押し引き文を施している。また、器面には石灰分が付着している。器厚は4.5mm程度。

2は砂質の胎土。黒色粒、雲母、石灰質粒を含む。外面は黄褐色を呈し、斜位で縦長の指頭押し引き文を施している。内面は赤みを帯びた褐色を呈し、やや丁寧なナデ調整を施している。器厚は5mm程度。

II 類(第3図3、4、5)

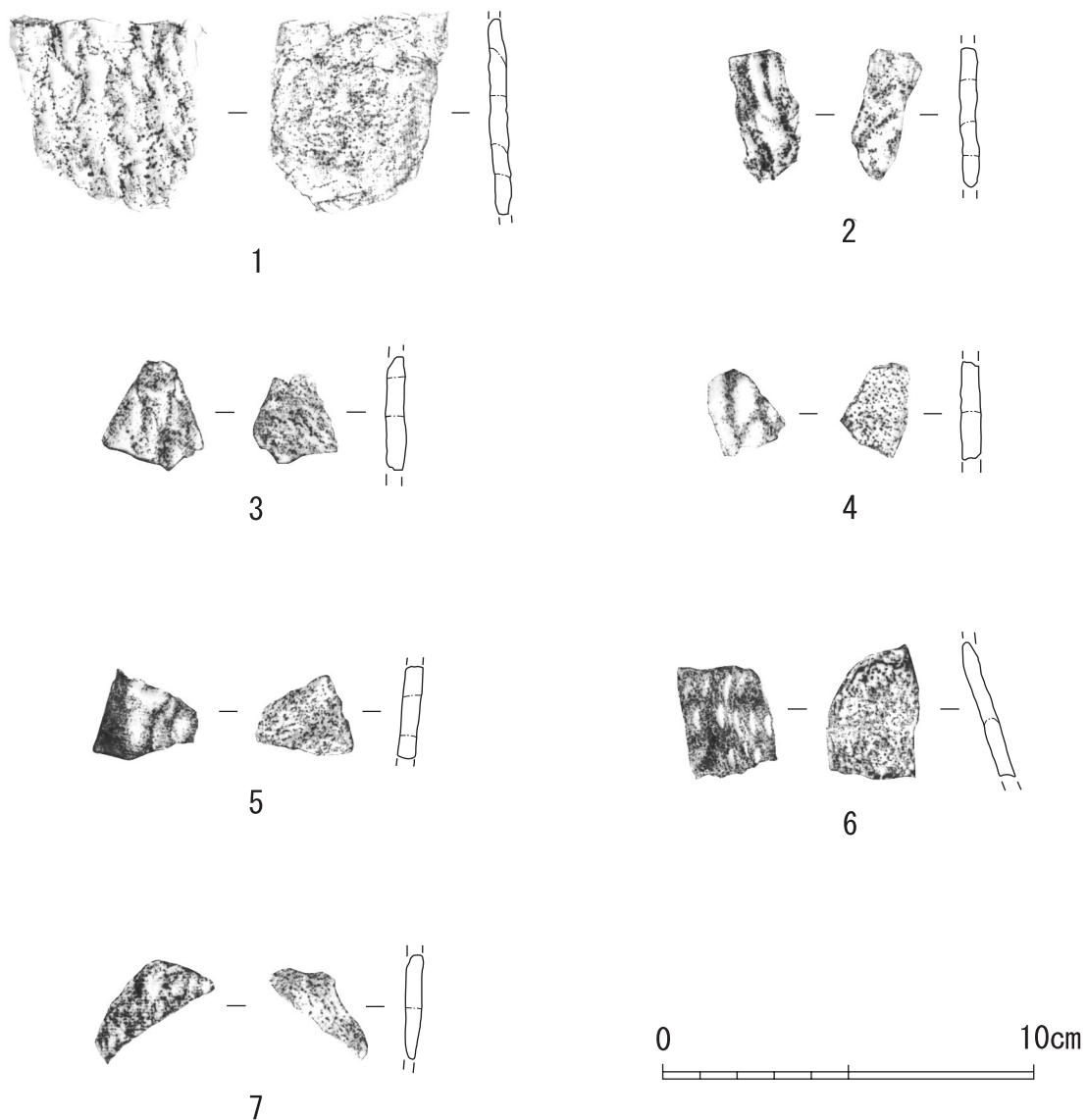
3は砂質の胎土。黒色粒、雲母、赤褐色粒、石灰質粒を含む。内面明褐色、外面は火を受けたため黒色を呈し、やや脆くなっている。また、器面にはD字状の指頭による押し引き文を施している。器厚は5mm程度。4は砂質の胎土で粗く、黒色粒、雲母、石灰質粒を含む。器面は褐色を呈し、D字状の指頭押圧文を施している。器厚は5mm程度。5は砂質の胎土で黒色粒、雲母、石灰質粒、赤褐色粒を含む。外面は暗灰黄色、内面は褐色を呈する。器面には逆D字状の指頭押圧文を施している。器厚は5.5mm程度。



写真1 岩陰地点遠景



写真2 岩陰地点近景



第3図 南島爪形文土器 (縮尺1/2)

Ⅲ類 (第3図6、7)

6は砂質の胎土。黒色粒、雲母、石灰質粒を含む。内向しながら伸び、上部が緩やかに立ち上がる器形。器面はオリーブ褐色を呈し、外面に3条の爪形文を施している。器厚4mm程度。7は砂質の胎土で、黒色粒、雲母、石灰質粒、赤褐色粒を含んでいる。内面は褐色を呈し、外面上部に指頭押圧文、下部に爪形文を施している。また、火を受けたため黒色化しており、やや脆くなっている。器厚は5mm程度。

今回表採された南島爪形文土器は器面の施文方法の特徴からⅠ類が野国タイプ、Ⅱ類がヤブチ式、Ⅲ類が東原式に属するものと考えられる。また、全て砂質の胎土で焼成も良く、器厚も4～5mmと薄手のものである。

(金城)

5 貝製品

貝製品は、貝小珠2点が崖下地点より採集されている。どちらも装飾品(装身具)と考えられるもの

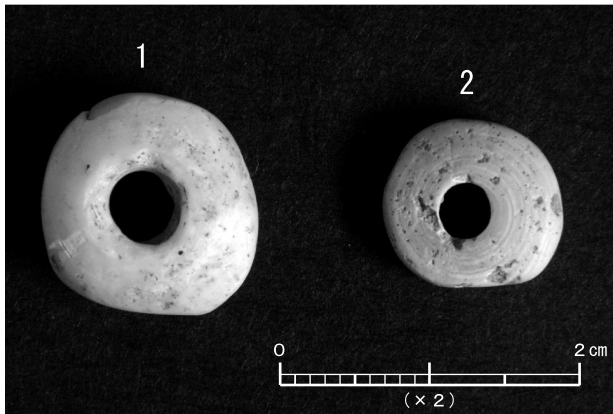


写真3 螺頭部側

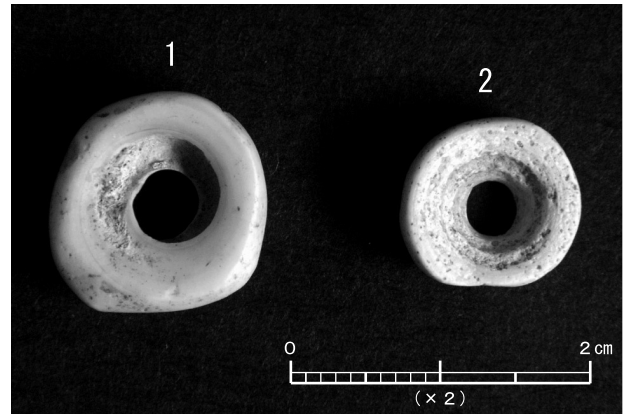


写真4 殻口部側

である（写真3、4）。

1はマガキガイ？と思われる。全体が水摩により丸味を帯びたものを使用している。螺頭部側の孔周辺に、紐などによる擦れが見られる。また、螺頭部側と殻口部側は、殻頂側に向かってアーチ状に摩耗している。研磨による摩耗か、接していたもの（例えば同製品）同士による重ね擦れかは不明である。最大径1.54cm、最小径1.40cm、最大孔径0.47cm、最小孔径0.42cm、最大厚さ0.64cm、重量1.8g。

2は小型イモガイ（貝種不明）を利用したもので、1と同様に螺頭部側と殻口部側が、殻頂部に向かってアーチ状に摩耗している。また、殻口部側の孔に一部紐などによる擦れが見られる。表裏面全体にアバタが見られる。最大径1.21cm、最小径1.10cm、最大孔径0.37cm、最小孔径0.34cm、最大厚さ0.48cm、重量0.8g。

（山田）

6 人骨

人骨は、岩陰地点と崖下地点双方から採集されている。このうち、岩陰地点では海産貝や焼けた動物骨とともに、人骨片10点が採取されている（写真6）。大腿骨、上腕骨、橈骨などの長幹骨片と、後頭骨や頭頂骨など頭骨片が含まれているが、いずれも微小骨片であり、形態学的な情報を得ることは困難である。

また、崖下地点からは頭骨片1点と四肢長幹骨片3点が採集されている（写真5）。これらは岩陰地点に隣接する部分から採集されており、岩陰地点の人骨と一連のものである可能性もあるが、四肢長幹骨

片は、いずれも岩陰地点採集人骨に比較して化石化の程度が弱い。大腿骨片と思われる1点には、破断面の一部に白色を呈する部分があり、この部分には表面のひび割れも認められるが、きわめて局所的であり、焼けた痕跡であるかどうかは判断が難しい。この大腿骨片は、表面が風化して層状に剥離した形態を呈している。こうした表面の状態は、他の骨片には認められないため、保存環境が異なっていた可能性もある。

これに対して、頭骨片は四肢長幹骨片よりも化石化が進んでいる。色調も長幹骨片と異なり、全体が茶褐色を帯びている。外表面の一部は白色から灰白色を基調として部分的に黒色を呈する部分がある。しかし、こうした色調は、焼けた結果である可能性も考えられるが、局所的にしか認められないため、埋土中の属性作用によるものと考えerほうが妥当であるかもしれない。いずれにしても色調や化石化の程度、表面の磨滅の状態などが長幹骨と頭骨片で異なっており、埋土環境が両者で違っていた可能性がある。

岩陰地点の人骨片は、いずれも表面が白色ないしは灰白色から黒色を呈しており、焼かれた骨であると考えられる。表面には火葬骨に特徴的なひび割れ等は観察されないため、白骨化したのちに焼かれた、いわゆる焼骨と考えられる。これらの焼骨はほとんどすべて、外表面と髄空側表面で色調に違いがある。そのため、骨幹の形態がある程度保たれた状態で火をうけ、その後、破損したと推測される。破断面の多くは磨滅が進んでおり、最近の破損ではない。また、大腿骨片2点は、破断面の形状から互いに接合

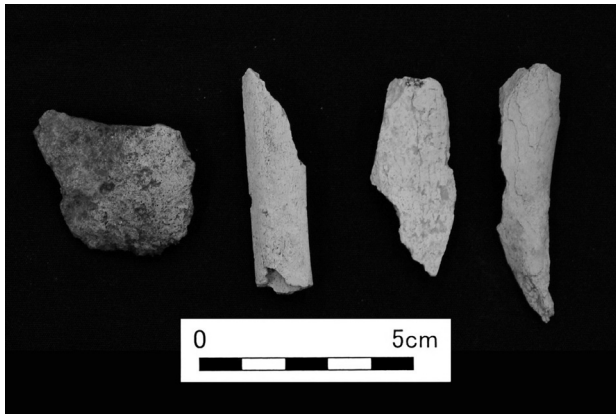


写真5 崖下地点採集人骨

可能だが、一方の破断面にはうすくトラバーチンが付着していた。すなわち、破損したのちにこの部位にトラバーチンが付着したと推定される。この接合可能な大腿骨片の存在からは、白骨化した骨が焼かれ、その後、破損し、同じ地点に埋没したというプロセスが想定される。そして、埋没している期間に、局所的な土中環境の違いによって一方の破片にのみトラバーチンが付着したのち、地表面に露出したと考えられる。

両地点ともに、骨片がいずれも小さく、破断面の形態が鋭角を呈することは、人為的に破壊されたことを想起させる。しかし、カットマーク等の人為的破壊を示す十分な根拠は認められないため、自然の破損である可能性も考えておく必要がある。

(藤田)

7 獣骨・貝類

人骨以外の自然遺物として、崖下地点よりイノシシ下顎骨片1点、魚類の咽頭骨、ハマグリが、岩陰地点よりカンギク、アマオブネ、アラスジケマン等の海産貝類とともに、種不明の動物骨が採集されている。

(山崎)

8 まとめ

最後に、今回報告した具志頭グスク崖下採集の遺物から派生する問題点について、以下にまとめておきたい。

① 爪形文土器について



写真6 岩陰地点採集人骨

奄美、沖縄諸島の爪形文土器は、野国タイプ、ヤブチ式、東原式の三種に分類されている。具志頭グスク崖下の爪形文土器は小破片ながら、これら三種の爪形文土器の特徴をもつものが含まれるようである。

沖縄島南部での爪形文土器の確認例は、本誌別稿で報告する南城市武芸洞（山崎ほか 2009）に続き、2例目となる。ともに海岸あるいは河床面から比高差のある洞穴あるいは岩陰であり、従来知られていた沿岸部の低地遺跡とは異なった立地をとる点は興味深い。このような遺跡立地上の特徴が、沖縄島南部の爪形文期に一般的な現象なのか、やはり特殊な立地であるのか、今後に残された課題である。

② 人骨について

人骨は岩陰地点で集中的に採集されたこと、化石化の程度もよく似通っていることなどから、付近に先史時代の崖墓が存在する可能性がある。ただし、岩陰地点は過去に風葬墓として利用された形跡があり、これらの人骨についても近代の風葬人骨である可能性を否定することはできない。しかし、人骨の中に火を受けたものが存在する点は、一般の風葬墓との差異である。また、石灰岩の岩壁下という立地上の特徴は、近年調査されたうるま市具志川グスク崖下や糸満市摩文仁ハンタ原遺跡など、縄文時代～弥生並行時代頃の崖墓にも類似する。岩陰地点からは、貝珠と考えられる遺物も採集されており、人骨との関連性の有無が問題とされるところである。

いずれにせよ、現状では人骨の年代的位置づけについて明確な結論を下すことはできないため、この

問題については、今後調査を進める中で解明していきたい。

末筆ながら、このたびの資料整理にあたり、伊藤圭、片桐千亜紀、崎原恒寿、土肥直美の諸氏には様々にご教示いただいた。記して謝意を表します。

(山崎・新里・金城・山田・藤田)

参考文献

具志頭村教育委員会 1986 『具志頭村の遺跡』 具志頭村文化財調査報告書第3集

當眞嗣一 1997 「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」 『沖縄県立博物館紀要』 第23号 沖縄県立博物館

土肥直美ほか 2008 『沖縄県具志川市具志川グスク崖下地区の発掘調査』 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書

山崎真治・藤田祐樹・西秋良宏 2009 「平成19・20年度南城市武芸洞遺跡発掘調査の概要」 『博物館紀要』 第2号 沖縄県立博物館・美術館